



わたしの花物語

壺井 栄

深沢 紅子 画

わたしの花物語

昭和49年3月25日初版発行
昭和53年12月10日5版発行

© 文・壺井 栄

© 装画・深沢 紅子

発行所・株式会社童心社

東京都新宿区三栄町22

振替 東京 75504

電話(357) 4181

写真植字・東京光画株式会社

製版・印刷・小宮山印刷株式会社

製本・株式会社難波製本所

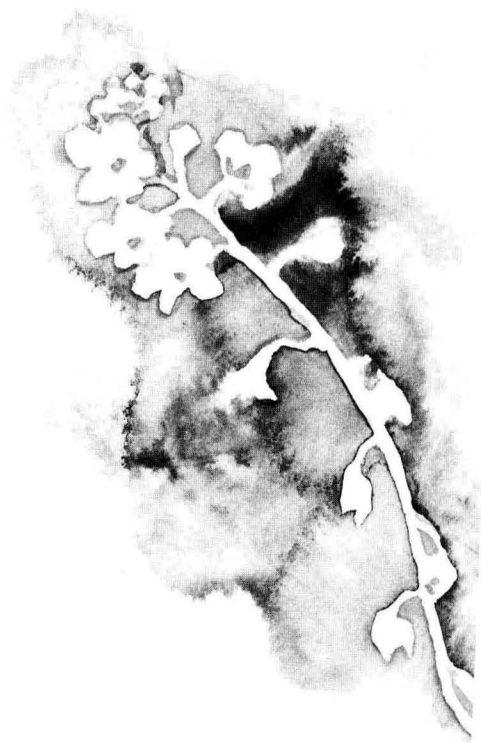
B 5 変型・21cm・96P・N D C 911.16

0393—780126—5253

わたしの花物語

壺井 栄

深沢 紅子 画





もくじ

春蘭^{しゅんらん}.....7

たんぽぽ.....11

水仙.....17

さくら.....25

オリーブ.....31

ばら.....37

みやまははこぐさ.....45



壺井繁治	解説	90
------	----	----

竹	81
---	----

尾花	75
----	----

萩	69
---	----

鳳仙花	63
-----	----

芙蓉	59
----	----

カーネーション	51
---------	----



春
蘭



通りすがりの花屋の軒下で、ふと春蘭の一株をみかけて、思わず私はそれを手にとって眺めました。東京の町の真中でみつけた春蘭の珍らしさからではなく、昔々の子どもの頃に、故郷の山野でみた春蘭の姿をそこにみつけたなつかしさからでした。私を客と思つて出てきた花屋のおかみさんに、帰りがけにいたしますとわびてそこをはなれましたが、春蘭の思い出は母とつながつて泉のように湧いてきました。

ある時は薪を、ある時は萱を背負つて、夕ぐれの山道を小走りに戻つてきた母の姿、いつもいつも軽やかにみえたあの足どりは、乳呑子のまつ家路を心せかれてかけていたのだと、今になつて気づく私です。過労でたおれる前の日まで、母の足は山道を走っていたのです。

おなかをすかして泣く妹をあやししながら、山や畑から帰ってくる母の姿を、私は毎日のように途中まで出迎えました。地蔵さまのそばでまつてしていると、おお、おお、いいながら母はいつそう早足でかけよってきました。泣き方がはげしい時は、家まで待てずに母の方から先にしよいこを畑の石垣にのせて胸をひろげました。指先を唾でぬらしてもむと、張り切つた乳首は水でつばうになつて親も子もかん声をあげるのです。まっ白な母の肌、顔は小麦色にやけて年中変わることがなかったのに、なんというそれはきめのこまかな、やわらかな、やわらかな、おもちのような肌であつたでしょう。しかし、それはただ乳房

だけであつたのかもしれませんが。母が、きめのこまかいからだであつたとは、私はどうしても思えないのです。水鉄砲のようによく出る豊かな乳をもっている母が背中の荷物によつちゆう春蘭の一株をつけていたからです。春蘭のことを、村の人たちはホッキリと呼んでいました。アカギレの妙薬として、母もそれを愛用していました。

貧しい農山漁村の主婦は、私の母だけでなく、天気さえければ一年の半ば以上を山や畑で暮らしています。時には地引網まで引きにいつてそれでようやく補う蛋白質だけでは、からだがもとでの主婦たちは、肉体をすり減らす一方です。多産な私の母など、油気が枯れつくしたようにやせてしまつて、夏場をすぎると、年中手足にアカギレをきらしていました。あんなに豊かな水鉄砲の乳房をもっていながら、涼風が立ちはじめるともう足のうらを気にしだし、霜月、師走のころから正月二月にかけては、四十歳の母が悲鳴をあげていました。そして、それをいやすのがホッキリでした。ホッキリの球根をつぶして筋をとりのけ、御飯粒といっしょにねつて、ねばっこくなつたのをアカギレの切れ目に入れるのです。

「まるで、あかごの口ほどもある。」

母はよく、自分のアカギレの大きさを誇張してそういいました。幾つも切れたあかごの口をホッキリでぬりこめて、破れた障子の紙を小さくちぎつては張りつけるので、母のかかとはハリボテになっていました。

「雪でも降るんかいな、今夜はえらいアカギレがいたむ。」

アカギレは寒暖の天気予報でもありません。働いて働いて、働き通さねば暮らしのたたなかつた貧しい母、アカギレが血をふいても、乳房はつやつやとしていた母、母性とはこんなものなのでしょうか。十人目の子どもがまだ乳ばなれもせぬうちに脳溢血でたおれた母は、なえてしまった半身の手足をたたいて口惜しがりました。

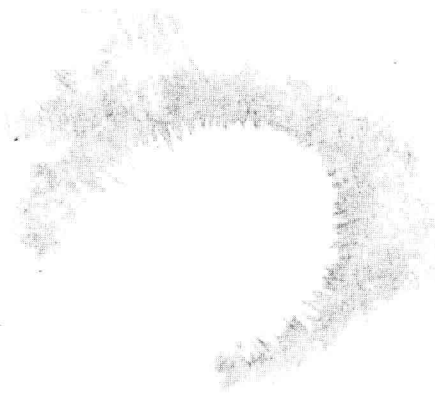
「この手が、この足が、なんという情けないことになってしまったんじや。」

まるで手足に罪があるかのように、くりかえしていました。年月がたつにつれて、母の手足はおひめさまのようにきれいになり、それきりホックリとは縁きれになりました。

あれからもう、三十幾年かたちます。東京の町の真中で春蘭をみつめて、ホックリの昔を思い出し十人の子育ての間には、春蘭のいのちもどれほどか犠牲にしたらうと、貧しい母親にかわって、親愛を感じている私でした。

たんぽぽ





ちようちんえ

ぼんぼりえ

嫁さん長持ちえ

歌いながら綿毛になったたんぽぽをちぎってとっては、
大きくいきを吸いこんでおいでふうと吹きとばすのです。

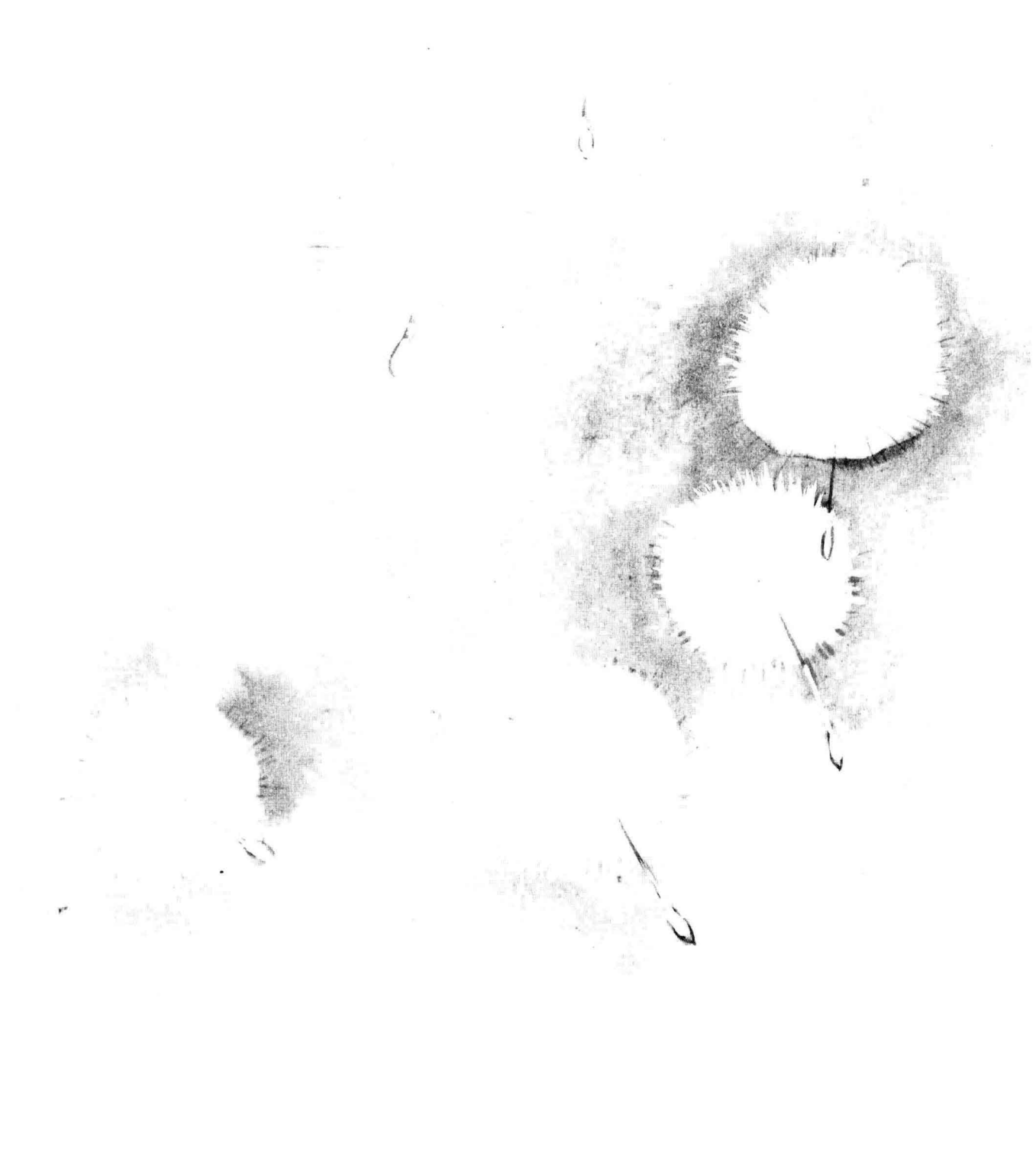
ちようちんえ

ぼんぼりえ

よめさんながもちえ

ふうっ！

小さな小さな蟻の国の落^ち下^か傘^きとでもいたい綿毛はい
きおいこんで吹きつけた人工嵐にあおられてふうわり空
中をおよぎ、やがて思い思いに散って見えなくなるので
した。うらかな春の野^の辺^べで、村の子どもたちはわれが
ちにたんぽぽの綿毛になったのをさがして走りまわりま
す。かつては私もそうして走りまわった幼い日のことを



思い出しながら、孫のような息子にそれをやってみせました。

「ちようちんえ　ぼんぼりえ　よめさんなもちえ　ふうっ！」

息子はよろこんで、庭中のたんぽぽからありつたけの綿毛をむしりとして小さいきをふきかけました。羽虫かなんぞのように、とんでゆく綿毛はせまい庭中に吹きちらされ、垣根をこえてとなりにとんでゆくもありました。

ひとたび根をおろすと、ふまれてもにじられても、たち上りたち上って、可憐な花をさかせるたんぽぽ！　この花のがまんづよさとひなびた美しさをすきで、うちの庭に株を移してから、もう八年になります。好きで移したといい条、それは、そのこと自体が目的の風流や道楽でやったことではなかったのです。戦争のはげしかったころ、私たちは野草をさがして田畑のあぜ道を歩きまわったではありませんか。季節ごとに楽しんだ嫁菜やせりは野の草ともいえなかったような哀しい時代でした。

さばさばの雑炊に今では名前さえも忘れた野草をきざみこんで食べ、碗をかえる勇氣さえてなかった幾度かの経験の中に、このたんぽぽも入っています。たんぽぽは一度うでて、あくぬきをして食べるとうまい。——新聞雑誌でみてそのとおりしてみましたが、再びたんぽぽさがしにゆく気持ちはわきませんでした。そのたった一度のたんぽぽをとって帰ったとき、私はふと、幼い日のわらべ唄を思い出し、一株を庭先に植えたのでした。

移植をきらうらしく、芽生えた土にしっかりとしがみついてなかなかぬきとれなかったたんぽぽはそれだけに傷みもひどくて、一度は枯れたかと思つたほどでしたが、やがてめ

きめきと育ちはじめ、翌年は見事な花をつけました。地べたにしがみついているような姿ばかりを考えていたたんぼぼが、やわらかな畑に移すとまるで野菜のように青々と、みずみずしい葉を空にむかつてのびしたのもおどろきでした。道ばたで踏まれて、にじられて、あんな地べたにはった姿になっていたのでしょうか。

それ以来、私の家の庭にはたんぼぼの一族が年ごとに殖はえています。

「たんぼぼをお庭につくるなんて変わったお宅ですね。」

たんぼぼ見物にきた近所の奥さんに笑われたりしたのですが、別に作ったわけではなく、殖はえるに任せたのです。そのたんぼぼと同じような偶然さで、私の家へやってきたのが、うちの孫のような息子です。たんぼぼと一年おくらで生後一年の男の子は私の家庭へ移ってきました。

芽生えた土地にしがみついてなかなかぬきとれなかったたんぼぼが、ぐつたりと萎なえてしまっていたように、この男の子もぐつたりとして、元気がありませんでした。この「たんぼぼっ子」は育つべき土地をうばわれたのです。戦争は生後一年のこの子から父も母もうばってしまったのです。戦争がわが家へ残していったこの二つの置土産きみちさんに、わたくしは無言の大声でよびかけましょう。

ふまれてもにじられてお前たちは生きのこったのだぞ。ふまれてもにじられても、お前たちの苦勞を再びくりかえさぬために、生きていくんだぞ！

その意味をこめて、私はこの、孫のようなむすこと、たんぼぼの綿毛を吹くのです。